

されて、各部の持っていたロッカーとかが廊下や階段下に散らばったまま今日に至っている。部室というのは大事なもので、部室があると放課後そこへ集まって来て、たとえ2人でも3人でも日常的に会話している中で何となく形が出来てきて、それが記念祭に出てくるというのが一番いいんだけどね。僕は中館の便所が広すぎるから半分つぶして上からずら一と文化部の部室にしてくれないとか、地下倉庫などを考えたんですがね。なんとか部室を作らないと、文化部特に展示系発展は難しいですね。

## 私にとっての記念祭とは何か

**高木** 記念祭についてまだまだ話が尽きないかと思うんですけど、最後にあなた方にとって記念祭とは何だろうか、芦高にとって記念祭とは何だろうか、そういう観点で一言ずついただければと思います。

**山本健** 執行部のメンバーとしての自分にとっては、ある一定の時期の自分自身の高校生活そのもの、自分を表現する場だったと思います。一般の生徒にとっては芦高生を自覚する場だと思いますね。「どんな高校やったん？」と大学に入ったり職場に行ったりして聞かれると、文化祭と体育祭を一緒にしたような記念祭というのをしてたんや、という話題の1つも出てくるものですから、俺は芦高生やったんやと自覚する1つの場面だと思いますね。

**安藤** 僕が現役だった時の記念祭というのは非常に大きな目の上のたんこぶで早くなくなればいいなあと思っていました。でも、終わったとたんに、自分の血となり肉となりという感じで、すごいことをやり遂げたという感じです。一般の自治会員である芦高生から見ると、芦高生を自覚するのは卒業してからのことで、その当時は休みが多くてお祭やという感じだったと思います。でも記念祭というのは僕は、それでいいと思います。

**伊塚** 私にとって記念祭というのは初めて執行部と芦高生という立場を認識させられた場なんです。私の大学のことで恐縮なんですけど、大学にも学祭というのがあり、私の友達で学祭委員というのをやっ

ている人がいるんです。学祭のメインは各クラブのたこ焼き屋さんとか、クレープ屋さんとかなんです。「クラブの子らのために、私は動いてやっているの」という言い方でその子が私にグチを言うんです。私は副会長やっていた頃を思い出すのですが、私も一時なんで皆こんなに動かへんかと思っていました。

でも、私達は前々の資料とかで計画を立てる側ですから、記念祭の全体のことをよく見えてわかるんで、代議員や一般生徒より知っているというだけで、彼らよりも上に立っているという錯覚に陥ると思うんです。いつまでもそんな風に思っていたら、いつまでも動かないなと思うんです。自らがしんどい目をして動かないといけないなと思いました。

**灘井** 僕は2年間執行部で仕事をしていました。1年生と2年生の時にやっていて、やっている時はすごい一生懸命なんです。3年生になってから執行部を離れて、一自治会員として記念祭に臨んだ時に、自分達が会長や副会長で仕事やっている時は皆こういう風に考えていたのかと感ずることができたんです。だから記念祭は執行部ではなくて学校全体の1つの大きな行事としてとらえなければならぬんじゃないかな。

**永田** 僕は安藤さんの代に副会長をやっていたわけです。今まで僕が23年間生きてきた中で、県芦の記念祭というのはとんでもないお祭り騒ぎだったといい意味で思います。特に執行部をやっていて面白かったこともあったし、とんでもなかった事もありました。実際に記念祭という行事が今まで続いてきていますし、これからも続いていくと思います。こういう経験をされる方がこれからもおられると思いますが、よろしいんじゃないでしょうか。

**平井** 僕は3年間一般生徒として記念祭に参加することはできなかったんですけども、一番よかったと思うのは、理屈抜きで「ああ良かったな」と感じられる経験が記念祭でできたということです。後輩達に残すのは、自分で良かったなと思えることができるようになってくれたらと思います。

**高木** ここでぜひ私にという方がおられましたら…。山本光一君、どうですか？

**山本** 僕はまだ高校生ですし、先輩方は外の世界と高校生とを比較しておられるようですが、中の世界しか見ていない僕達には何とも言えません。

**鳥本** 記念祭を通して、自分がいたらなくて何もできなかった時でも、執行部と関係ないクラスの人や執行部に関係している友達に、すごく後押ししてもらいました。そういう友達を持っていることに気付けたことが良かったと思います。私は執行委員ではありましたが、クラスの人たちとの触れ合いみたいなのが嬉しかったです。

## 二. 定期戦と実行委員

**高木** とりあえず、これで記念祭に関することを終えさせて頂きたいと思います。次に定期戦について話をしたいと思います。お手元の資料に第21回から今年の30回までのスコアがあります。22回と30回は敗戦しております。ではどうぞ。

**山本光** 今年は県西の方から西宮市民グラウンドでなく県西でやろうではないかと強く要請されました。その主旨は定期戦も低迷化しているということでした。確かに運動部はちゃんとするし、運動部では盛りあがっているのかもしれませんが、定期戦というのは芦高では自治会活動であり、運動部の活動ではないのですが、県西では非常に参加意識が低いので、内容充実のために県西でやったらどうかとかなり押されました。当時記念祭が6月に変わったばかりで、ややこしい時期だったので、今年は勘弁してほしいと言ってなんとか許して頂いたんです。しかし、芦高の生徒の中でも定期戦に参加も応援もせずに、単独行動をとる者が増えてきていて、自治会活動として成り立たなくなってきたという現状があります。

**高木** 曽我さんはどうですか？

**曽我** 私は多分3代目の女性運動部長と言われて、生徒にも運動部の方にもなめられたところがあったんです。一番大きな行事として定期戦を手掛けましたが、私達の頃は山本光一君がおっしゃったように自治会活動という捉え方ではなく、進んで運動部がやろうと意欲を持ってやっていたのでかなり

楽でした。一般生徒の方も運動部の方達を温かい目で一生懸命応援して参加してくれたのですね。私にとっての定期戦は生徒と運動部員が一体となって作りあげたものだったので、先程の話のような現状に対して寂しい気がします。

**佐藤** 僕達の時の前哨戦は交互に相手校へ行っていたのですが、県西の生徒は県西でやる時も詰めかけて行きますが、県西の生徒は自分の学校でやっても応援者が少なかったわけです。そのことが県西側からすればもう少し盛りあげなければと思う理由になっていると思います。県西では野球を知らない人でも見に来てくれる、応援してくれる。そういう点がよいと思います。

**山本** 僕の代の県西の会長さんがほやいておられたのですが、県西でやっても芦高生が見に来るのはなぜか。芦高生は野球を見に行くと勝つという気持ちがあります。県西生は定期戦を見ても、絶対勝つという気持ちがありません。県西生からするとなぜ負ける試合を見に行かないとだめなのかという気持ちがある。芦高生というのはようするに勝つことを期待しているから見に行けるんですよ。

**佐藤** 今年からは変わるでしょう。(笑)

**高木** 他にございませんか。

**山本健** やっぱり僕は県西に両校の生徒が物理的に入りきれぬのなら、いいと思うんですけど、西宮市民グラウンドでやるというのは一日かけて全部の運動部が一度に戦う、それで両校の生徒が応援にくる、そして僕は芦高生の一員として所属している学校を応援するんだという意味で、一体感なり愛校心なり学校に対する帰属感なりが生まれてくる。それが大切だと思います。僕はすごく印象的だったんですけど、四月に入学して五月に定期戦がありますから、一年生の時に実行委員に選ばれてやったんですよ。当時はまだ硬式野球部が西宮のグラウンドで試合してたんです。高校野球といえば全国的に人気のある試合でしたから、グラウンドのスタンドに入りきれないほど芦高生が並ぶんですよ。それで9-8かなにかで勝ったんですけど、最後にはもう今年の藤井寺球場ではないですけど、言わなくても皆立つという感じでした。「さあこれで勝ち逃げなんだから、